HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ブラキストンの鳥類標本ノートについて
Author(s)	加藤, 克
Citation	北大植物園研究紀要, 13, 35-47
Issue Date	2013-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53163
Type	departmental bulletin paper
File Information	BBG13_002.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ブラキストンの鳥類標本ノートについて

加藤　克[i]

はじめに

筆者らは、北海道大学植物園・博物館[1]に所蔵されているブラキストン（Thomas Wright Blakiston）採集鳥類標本について、標本に付属しているラベルおよびブラキストンの書き残した出版物の精査を通じて、標本情報の修正や標本が持つ歴史的価値について明らかにしてきた（加藤 2012）。コレクションや標本に対するこれまでの評価のうち、旧稿において修正が必要であると考えられた事項は以下の点である。（1）ブラキストンが標本に付与したと考えられてきたラベル（高倉ほか 1986）は、後世に博物館において付与されたものであり、その記載情報には多くの誤りが含まれている。（2）ブラキストンが付与したラベルは、ブラキストンやその協力者が研究報告において利用している標本番号が記載されているものである。（3）ブラキストンが日本に残した標本数は、1,314 点、1,338 点など史料上に様々な記録が残されている。また、ブラキストンは、当初は一部の採集標本をイギリスの研究者に送付していたが、最終的には日本にすべてを残していったと考えられていた（Inukai 1932）。しかし、帰国後にブラキストンは相当数の標本をスミソニアン協会自然史博物館に寄贈している（Stejneger 1886a）ことから、必ずしもすべての所蔵標本を日本に残したわけではなく、寄贈当初の契約数 1,314 点のみが日本に残された標本点数であると推測される。（4）ブラキストンは標本を函館博物場に寄贈するにあたって番号のみを記載した別のラベルを付与し、これを「Hakodadi Mus. No.」として用いていた。これらの成果によって、ブラキストンが収集した標本の特徴が判明し、これまで北大植物園・博物館において「ブラキストン標本」として管理されてきた標本群の中には、ブラキストンによる収集以外の由来を持つ標本の混入が相当数確認されたことから、その再検討の必要性について指摘するに至った。

しかしながら、これまでの研究は日本に現存する標本とそのラベルに基づいて実施しており、「ブラキストンコレクション」としての解明には限界や制約が生じていた。これらの課題について整理しておきたい。（1）旧稿において利用した情報はブラキストンが日本に残した標本のラベルのみに限定され、ブラキストンが日本でどれほどの標本を収集していたのか、つまり「ブラキストンコレクション」の全容という基本的な情報を得ることができない。（2）北大植物園・博物館に所蔵されているブラキストン標本と考えられてきたコレクションのうち、付属ラベルからブラキストンが収集した標本であることが確認できる標本数は 1,200 点を超える程度であり、ブラキストンが日本に残していったと考えられる標本点数からは 100 点ほど減少しているものと推測される。これらが標本管理や函館博物場からの移管の過程において紛失したものなのか、ラベルの欠落によりブラキストン標本として確定できないだけなのかについては、寄贈標本群の原形が把握できない現状では明らかとならない。（3）利用できる標本群には別コレクションの標本が混入しているだけではなく、ブラキストンが付与したラベルの欠落や混入があることが示唆された。しかし、検討に際して利用できる情報は現状に基づくものでしかなく、混乱を修正することができない。このため、混入した可能性のあるラベルの情報に基づく標本の検討は信頼性に欠けている可能性がある。（4）従来ブラキストンの直筆ラベルと誤認されてきたラベルに記載されている採集情報は、ブラキストンが付与したラベルとの照合の結果、無視できないほどの誤りが確認される。このため誤認ラベルに基づいた検討や今後の研究利用は避けられなければならないが、ブラキストンのラベルの欠落・破損により、誤認ラベルによる採集情報しか得られない場合にどのように対応すべきか判断が困難である。

これらの問題点を解決するためには、ブラキストンコレクションの原型を明らかにすることが不可欠である。今回、ブラキストン自身が書き記したノートの現存を確認し、その内容について調査する機会が得られた。このノートから得られる情報によって、ブラキストンコレクションの復元が可能となり、さまざまな問題点の解決や、現存標本の採集情報の追加・修正による標本価値の向上、また新たな発見が導き出されることになるものと期待される。本稿では、それらの報告に先立ち、検討の基礎となるブラキストンのノートそのものについて検討・紹介した上で、予報的に今後の展開について述べることとする。

---

[i] 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

1. ノート群の概要

1883（明治 16）年、ブラキストンは 20 年以上滞在した日本を離れ、イギリスに帰国した。翌年にアメリカに渡り、スミソニアン協会自然史博物館（以下、NMNH と表記）のスタイネガー（L. Stejneger）に標本とノート・手稿を寄贈した。これらの標本とノートに基づき、スタイネガーは日本の鳥類に関する報告をまとめた（Stejneger 1886a 他）。スタイネガーの報告にはブラキストンが日本に残してきた標本に関する言及もなされ、そこには北大植物園・博物館に現存する標本に付属するラベルに記載されていない詳細な情報が含まれていることから、ブラキストンコレクションの検討の上でブラキストンのノートは重要な役割を果たすものと考えられた。そこで、筆者はアンドリュー・デイビス氏の協力を得て、ノートの所在について調査を行った結果、ブラキストンが寄贈したとされるノート類が NMNH の鳥類学部門の図書室に保管されていることが明らかとなった。ここでは、ノートを含むブラキストンが寄贈した資料の概要について紹介する。

残されていた資料は、直筆のノート 4 冊およびブラキストンが日本の鳥類について雑誌「The Chrysanthemum」に連載していた「Ornithological News」のうち、NMNH の標本採集者であったジューイ（P. L. Jouy）の活動に関わる記事（Blakiston 1883）のスクラップ[2] である。

ただし、ブラキストンが寄贈したノート類がこれらのみであるかどうかは、検討の余地がある。今回調査をおこなった 4 冊のノートにはそれぞれ付箋があり、「Thomas Wright Blakiston」という記載の後に「#2」、「#3」、「#3（vol.2）」、「#4」という番号が与えられていることから、「#1」という番号を持ったノートが存在していた可能性が高い。この「#1」がスクラップブックにあたるのか、別のノートが存在していたのかについては現時点では明確にはならないので、この点については今後の課題としたい。

以下、それぞれのノートの持つ情報、特徴や問題点などについて紹介してゆくこととしたい。

2. ノート 3：ランニングカタログについて

最初に、「#3」および「#3（vol.2）」の付箋を持つ 2 冊のノートについて確認しておく（以下、2 冊をまとめて言及する場合は「ノート 3」と表記し、個別に示す場合は「ノート 3-1」、「ノート 3-2」と表記する）。

この 2 冊のノートは、同じ規格の細長いノートであり、表紙には「Running Catalogue Book1」、「Running Catalogue Book2、Classified Catalogue」という記載がある（写真 1）。内部はいずれも見開き右側の頁を利用した後、左側の末尾から記載を継続している。内容の大部分はブラキストンが 1860 年から 1883 年までの間、中国と日本において収集した鳥類標本を管理番号順に配列・記載したランニングカタログである（写真 2）。以下、カタログ以外の記載を含め、詳細について紹介してゆきたい。

ノート 3-1 の冒頭には「specimens of Birds Eastern collection」という記載があり、501 から 698（682 は欠）までの管理番号を持つ中国産標本がまとめられている。採集地および採集年次は管理番号 501 ～ 657 が広東（1860 年 5 月 26 日～ 1860 年 11 月 20 日）、658 ～ 681 が上海（1861 年 1 月 2 日～ 1 月 18 日）、683 ～ 698 が揚子江、鎮江（1861 年 2 月 16 日～ 6 月 14 日）などブラキストンの揚子江探検前後の採集標本である[3]。個々の標本の項には、種名、採集地、採集日、性別や計測値などが記載されているが、種同定が困難であったようで、朱書きで種名が補筆されている場合や種名記載がないものも多い。また、いくつかの標本の記載は「ex. with Swinhoe」や「Stevens」といった記載で抹消されていて、標本交換や寄贈の実態を把握することができる。

中国産標本の記載の後、「Japan」として 701 から 774 までの日本産鳥類標本がまとめられている。これらは 1861 年 7 月 30 日から 10 月 30 日までの函館産のもので、ブラキストンが揚子江調査ののちに避暑のために函館に滞在した時期の標本である。記載情報は中国産標本とほぼ同様であるが、ブラキストン自身が採集したもののほか、「from Bird Catcher」として採集・販売業者から購入したと考えられるものが 10 点近く含まれている。また、管理番号 745 の「*Charadrius* ♀　1861 年 9 月 17 日」のコレクターとして「Maximovitch」の名前を見ることができる。このマキシモヴィッチ（C. J. Maximowicz）は、当時函館に滞在していた著名なロシア人植物学者であり、ブラキストンの日本の鳥類に関する最初の報告（Blakiston 1862）にもその名前が確認できるが、このノートがその交流を示す証拠となる。

日本産標本の記載の後、「Ornithological Note」として広東、上海などでの観察記録とみられる記載が数頁あるのち、管理番号 901 から 921 まで広東で採集した鳥類標本の記載がある。ただし、これらについては、管理番号と英名などの簡単な記載があるのみで、詳細な採集日などの情報を得ることができない。

管理番号 900 番台の中国産標本の記載の後に若干のメモがあり、ついで管理番号 1001 から始まる日本産標本の



写真 1　ブラキストンノート 3　表紙
（左：3-1、右：3-2）

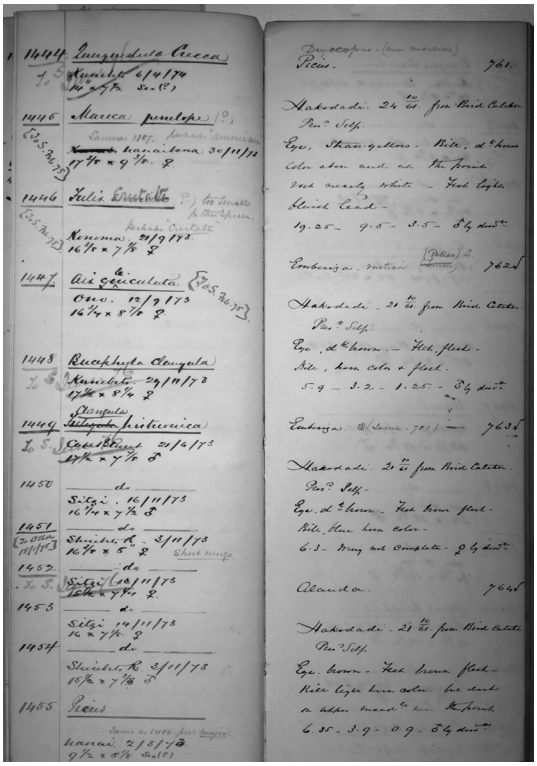


写真 2　ブラキストンノート 3　カタログ部分

リストが始まる。ノート 3-1 は管理番号 2000 までの標本（管理番号 1494 は重複している）に関する記載であり、1872 年 3 月から 1876 年 5 月ごろまでの間に採集、あるいは協力者から譲り受けた標本群の情報が得られる [4]。カタログの冒頭部分の標本記載には、部位の色などの記録もあるが、後半になるにしたがって採集地・採集日・性別・計測値程度の情報になってゆく。このほか、「Fukusi」や「Pryer」、「Ringer」といった標本採集者の情報や「To Swinhoe 1873」など標本寄贈先の情報が確認される。ノート 3-1 記載の末尾には「Continued Book　II」とあり、ノート 3-2 に記載が継続することが示されている。

ノート 3-2 の記載内容はノート 3-1 に続くもので、管理番号 2001 から始まり 3267 までの標本が記載された後、「T301」から「T305」までの 5 点の標本の記載がある。記載された標本の採集年次は 1876 年から 1882 年 11 月の間のもので、離日に至るまでの収集標本の情報であることがわかる。なお、「T」で始まる 5 点の標本は、T301 は上海、T302 は厦門、T303 はダージリン、T304 と T305 はイングランドの標本であり、すべて「from Seebohm」という記載がある。

ノート 3-2 にのみ確認される記載としては、1879 年末以降の収集標本にあたる管理番号 2677 から 2762 付近の標本には「HDMus No.」という記載がある（写真 3）。管理番号 2677 から 2700 までは「1315」から「1338」までの連番である。「HDMus」とはブラキストンが標本を寄贈した函館博物場を示すものと考えられ、番号はブラキストンが博物場において管理させるために付与したラベル番号と評価される。「HDMus No.」が「1315」から始まっているのは、1879 年にブラキストンが 1,314 点の標本を寄贈した後に、管理番号 2677 以降の標本を追加して寄贈し、それらにも「HDMus No.」を付与していたことを意味する。ただし、これらの番号は抹消されたり、朱書きで修正されている。また、管理番号 2762 以降の標本には「HDMus No.」の記載がなくなることから、一時的に利用していたものと位置付けておく必要がある。

ノート 3-2 には、以上の標本カタログに加え「Catalogue of Specimens in England in Dec. 1883、arranged according to Blakiston and Pryer Birds of Japan. Trans. As. Soc. Japan vol.X pt.II」という記載があり、以下にブラキストンとプライヤーがまとめた日本産鳥類目録（Blakiston and Pryer 1882）の配列に従って種名を記載し、その下に管理番号の記載がされている部分がある（写真 4）。ここに記載のある一部の標本には「B. Mus 7/1/84」や「To Seebohm 7/1/84」という朱書きの追記がある。これらのことから、この記載はブラキストンが日本からの帰国時に持ち帰った標本のリスト

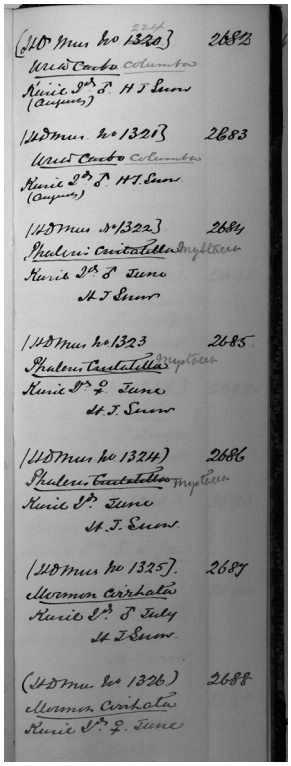


写真 3　HDMus No. 記載

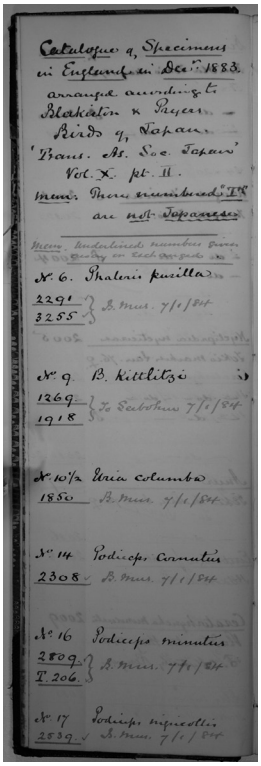


写真 4　帰国時に持ち帰った標本リスト

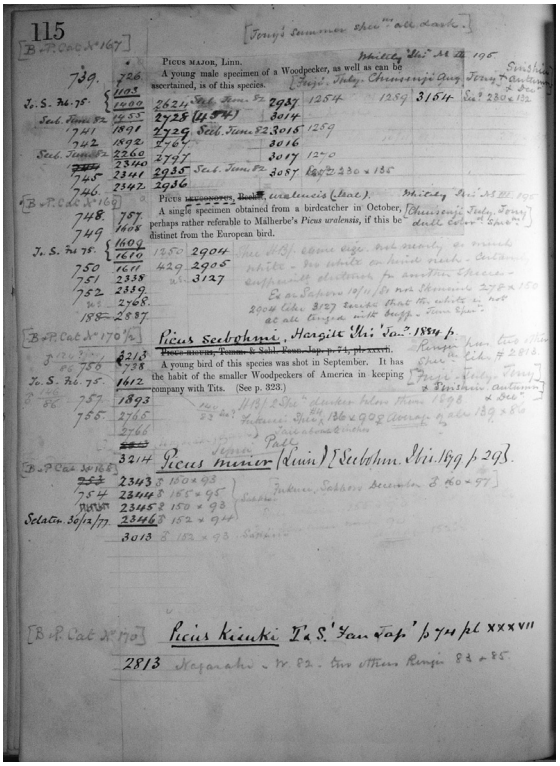


写真 5　ノート 4 の記載

であると推定される。

なお、このリストにはノート 3 に確認できるブラキストンの管理番号の他に「T」で始まるノート 3 に確認できない管理番号（T1 から T215）が含まれている。この「T」については、持ち帰った標本リストの冒頭に「mean: These numbered "T" are not Japanese」とあることから、日本産標本以外の標本を示すことが分かる。

3. ノート 4：種別ノートについて

次に、付箋に「＃ 4」とあるノート（以下ノート 4 と表記）について確認する。このノートの表紙には「Birds of Japan　Blakiston」という紙片が貼り付けられている。ノートの各頁の肩には頁番号がスタンプで捺されているが、頁番号は順になっておらず、原型とはかなり異なった状態になっているものと推測される。また、多量のメモ用紙やノート片が挟み込まれたり、貼り付けられているノートである。

このノートには多様な記述があるものの、基本は種別の標本リストとそれを利用した考察のノートである。写真 5 にみるように、当該種に関する記載のある報告の頁をノートに貼り付け、ブラキストンが収集した当該種の管理番号を記載している。貼り付けられている報告は、ブラキストンによる日本産鳥類に関する報告（Blakiston 1862）とプライヤーとの共著になる「Birds of Japan」（Blakiston and Pryer 1882）である。「Birds of Japan」の各種の記載には種番号が印刷されているが、1862 年の報告には種番号の記載がないため、これを用いている場合は、[B & P Cat N 169] といった形で種番号がわかるように記述している。なお、ノート 4 の記載は日本産標本のみを対象にしており、ノート 3 の 500~600 番台、900 番台、「T」番号を持つ標本は確認することができない。

「Birds of Japan」においては、最終的に 385 種に関する記載があり、それぞれに種番号が与えられている。「Birds of Japan」の種番号とノート 4 とを照合した結果、ノート 4 には 385 種中 369 種に関する記載が確認された。記載のない種は、当該種が千島や中国で採集された標本のみで「Birds of Japan」に記述されているものであったり、『Fauna Japonica』（Temminck and Schlegel 1850）など先行研究に記載があるもののブラキストンがその存在について確認できなかったり、判断を留保している種のみ [5] であることから、このノートにはブラキストンが日本で調査を行ったほぼすべての種についての記述があると評価される。また、このノートに記載されている標本点数は 2,270 点余りで、ブラキストンが日本で収集した標本 2,340 点あまりの大部分が記載されていることになる [6]。

ノート 4 に記載されている標本の情報は、管理番号とその脇に朱書きの番号や人名と日付（写真 5）が記載されていることが基本的なルールである。管理番号脇の人名と日付は、ブラキストンが当該標本を送った相手に関する情報であり、「Swinhoe」、「Sclater」、「Ota」などの送付先を知ることができる。また、朱書きの番号はスタイネガーの一連の報告（Stejneger 1886a 他）および旧稿（加藤 2012）の考察、ノート 4 の冒頭にある「Marginal ■ B Numbers in red and same in black bracketed refer to Hakodadi Museum Catalogue from 1 to 1314」から、ブラキストンが函館博物場に寄贈した際に付与したラベル番号（ノート 3 の「HDMus No.」、スタイネガーによる「Hak. Mus. No.」）である。

ノート 4 に記載がある函館博物場のラベル番号は、「1」から始まり「1314」まで続き、記載ミスと判断される若干の重複とそれに伴う欠落などがあるほかは連番になっている。なお、例外的に「1323」をもつ標本（管理番号 2685 のシラヒゲウミスズメ）がある。この標本は、ノート 3 においても「HDMus No.1323」の記載があるが、ノート 4 にはあわせて「To Pryer 1/6/81」という記載もある（写真 6）。函館博物場のラベル番号である以上、プライヤーに送付したことでこの番号は抹消されるべきものであるが、抹消されないまま残されたものと考えられる。また、ノート 4 の函館博物場のラベル番号は抹消や修正などが数多く行われており、複数回の標本の出し入れがあったことが示唆される。

標本リストの他には、写真 7 のような特定の種の分類・分布検討のメモであったり、採集協力者から得た情報、「Birds of Japan」執筆にあたって調査を行った他の博物館の標本情報などが記載されている。

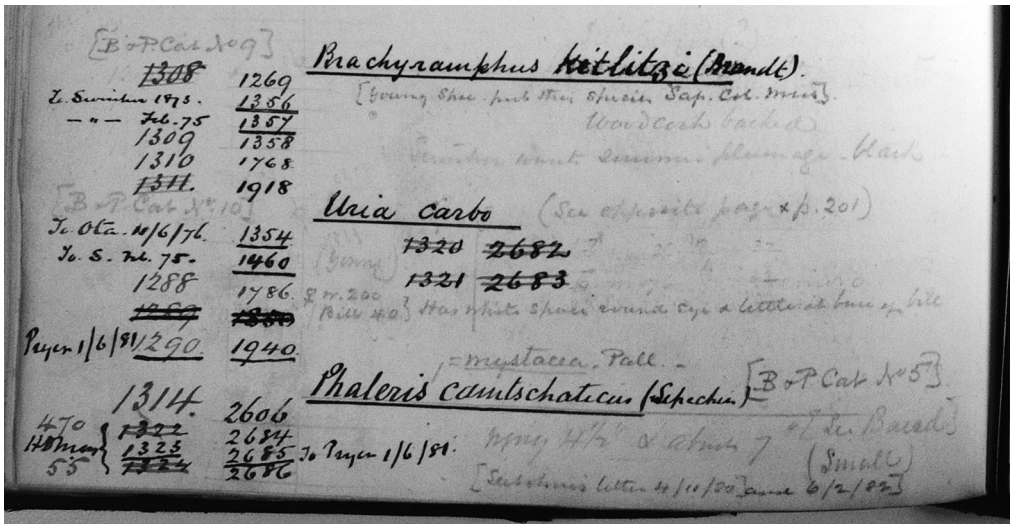


写真 6　「1323」の番号が「2685」の左にあり、右側に「To Pryer 1/6/81」の記載がある

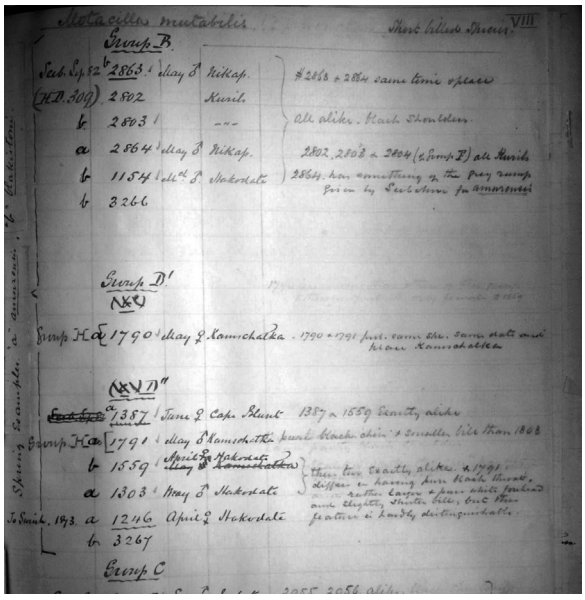


写真 7　ノート 4 においてセキレイ類をグループ分けして検討している部分

4. ノート 2：NMNH 寄贈標本ノートと NMNH 標本カタログについて

最後に、付箋に「#2」とあるノート（以下ノート 2 と表記）について確認する。ノート 2 には、表紙に「Birds of Japan」という印字紙片の下に手書きで「China &」と書き加えられているメモが貼り付けられている。

内容は写真 8 に見るように、「Birds of Japan」（Blakiston and Pryer 1882）の種番号と学名の記載ののち、管理番号のみが記載されているものである。記載種は「No.85 *Aegialitis cantiana*」に始まり「No.325 *Circus spilonotus*」に終わるが、写真のように種番号の無い種も多く見受けられる。これは、種名の下に記載されている管理番号が日本産標本でないことを示す「T」で始まっていることからも推測されるように、当該種が「Birds of Japan」に記載されておらず、ブラキストンの種番号が存在しないためである。

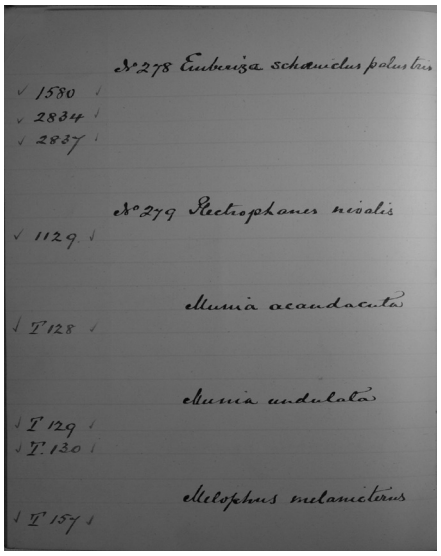


写真 8　ノート 2 の記載

ノート 2 に記載されている標本点数は 577 点と少なく、また種番号 85 以前のものがないという特徴がある。この特徴は、記載されている標本が特定のグループを構成していることによる。まず、ノート 2 に記載のある管理番号は、ノート 3-2 の「Catalogue of Specimens in England in Dec. 1883」のリストに含まれているものである。このリストに含まれている管理番号のうち、ノート 2 に掲載のないものは、大英博物館やシーボーム（H. Seebohm）らに寄贈した標本であることがノート 3-2 の注記から判明するので、ノート 2 に掲載されている標本はブラキストンが 1884 年時点で最終的に所持していたもののリストであると評価される。そして、このノートに記載のある標本は 2 点を除き、後述する NMNH の標本台帳に掲載されているブラキストン寄贈標本とも合致していることから、NMNH への寄贈リストという評価も可能である。

ノート 2 記載標本が最終的に NMNH に寄贈されたものであることから、ここで NMNH の標本台帳についても紹介することとしたい。

スタイネガーによる日本産鳥類標本に関する論考（Stejneger 1886a 他）は分類群ごとに考察されていること、またブラキストンから寄贈された標本のみを用いているわけではないため、スタイネガーの報告からはブラキストンから寄贈された標本群全体を把握することができない。また、2013 年時点で公開されている NMNH の鳥類標本データベースにはすべての標本が登録されているわけではないため、現時点ではすべてのブラキストン標本を検索することができない。この問題を解決するため、NMNH の標本台帳原本の調査を行った。

標本台帳によれば、1884 年にブラキストンから寄贈された標本は、標本番号 USNM95934 から 96608 として登録されているが、96009 の次に 96110 の番号を記載しているため、96010 から 96109 までが欠番となっており、総数 575 点となっている。標本台帳には、ノート 2 に対応するブラキストンの管理番号、種名、性別、採集地、採集日、一部の標本には計測値の記載があり、全ての標本に「Gift, 1884.Mar.24」の記載がある。

ノート 2 記載標本のうち、NMNH に寄贈されていない 2 点の標本（ブラキストン管理番号 2290 の *Chelidon dasypus* および管理番号 T12（1789）の *Hirundo tytleri*[7] は、ノート 3 のイギリスに持ち帰った標本リストにおいては寄贈先が記載されていない。このためノート 2 に転記されたものと推測されるが、ノート 2 のこれらの標本番号の脇には、「Sharpe B. Mus」の記載があることから、ノート 2 作成以降にシャープ（R. B. Sharpe）に寄贈したか、あるいは NMNH に寄贈する際にこれら 2 点の標本がないことが判明し、その寄贈先を追記したのかもしれない。

NMNH の標本台帳には、この他にいくつかのブラキストン関連標本の存在を確認することができる。一つは標本番号 USNM16753 から 16804 までの Hudson Bay Teritory 採集標本と卵標本である。これらはブラキストンがアジアを訪れる前の 1860 年 2 月に寄贈されたもので、パリサー探検隊の一員として調査を行っていた時期に採集された標本群である（Blakiston 1861）。このほか、ブラキストンが日本を離れる直前から日本、朝鮮半島の動物標本調査を行っていたジューイとの間で行われた標本交換の結果、ジューイ標本として NMNH に納入された標本の中に含まれているブラキストン採集標本の存在も標本台帳から確認することができる（USNM91537 および USNM91538 のミヤマカケス）。また、ブラキストンが多くの標本を送付していたイギリス人研究者シーボームから NMNH に寄贈された標本群の中に、採集者の名前として「Blakiston」の記載のあるものが 1 点存在する。ただし、ブラキストン自身が利

用していたラベルには「Blakiston」の名前が記載されていなかったこともあり、シーボーム寄贈の標本群の中でブラキストン由来の標本であることが明らかになっていない標本も存在する。一例として、シーボーム寄贈標本に含まれているイソシギ（USNM102109）を挙げよう。NMNH の標本台帳では、採集者欄が空白になっているが、写真 9 にみるようにこの標本にはブラキストンが利用していたラベルが付属し、管理番号「1485」の記載がある。この標本には「Swinhoe」のラベルも付属していることから、ブラキストンからスウィンホー（R. Swinhoe）へ送付された後、シーボームに送られ、さらに NMNH へと寄贈された標本であることがわかる。このような標本寄贈の流れの中で、ブラキストンが収集した標本であることがわからなくなってしまったものも多くあるものと推測されることから、さらなる精査が必要になる。



写真 9　イソシギ（USNM102109）付属のブラキストンラベル

5. ノート群の価値と今後の展望

NMNH に保存されていたブラキストン関連の情報は前節までに確認したものである。これらの情報から得られる新たな知見や研究面での進展が期待される事柄について、最後にまとめることとしたい。ただし、これらの知見を確固たるものとして立証するためには、本稿で提示しなかったノートにおける個別標本の記載情報と現存標本との総合的な照合作業が必要となる。それらの検討については別稿で行うこととし、ここでは概要を報告するにとどめる。

（1）ブラキストンコレクションの全容解明と標本管理方法の確認

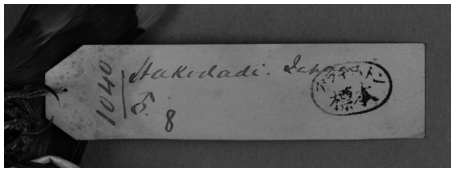
ブラキストンの標本ノートが確認されたことにより、ブラキストンが 1860 年以降にアジアで採集した全標本を把握することが可能となった。これまでの検討では、北大植物園・博物館に残されている標本群のみを材料としていたため、700 番台の管理番号を持つ 1861 年の函館滞在時の標本の一部と、1001 から 3220 までの管理番号を持つ現存標本群という存在を確認することはできたが、600 番台以前、800 から 900 番台までの中国産標本や現存標本から確認できる管理番号の末尾である 3221 以降の標本の存在については明らかとすることができなかった。しかし、このノート群によって管理番号 501 から 698 および 901 から 921 までの中国産標本 219 点、701 から 774 および 1001 から 3267 までの日本産標本 3041 点（番号重複などを無視した点数）がブラキストンのアジア産標本であることが明らかとなった。


写真 10　函館滞在時に利用していた金属タグ
キセキレイ（HUNHM03139）付属

また、旧稿においてブラキストンは 1861 年の函館滞在時の標本には金属のタグ（写真 10）を用いて管理番号を付与し、管理番号 1001 以降の標本は紙のラベル（写真 11）を利用していたという推定、また番号のみが記載されたラベル（写真 12）は、ブラキストンが付与した函館博物場の管理番号であるという推定も、写真 13 にみるように、ブラキストンの管理番号、函館博物場の管理番号、ノート 3 において対応する管理番号を持つ標本の採集情報とが合致することから、正しいものであったことが確認された。

ただし、この情報は日本産標本にのみ適用できるということに留意する必要がある。ノート 3 のイギリスに持ち帰った標本のリストやノート 2 の NMNH 寄贈標本リストにみるように、ブラキストンは日本産標本以外には「T」で始まる管理番号を付与していた。つまり、ノート 3 において 500 から 600 番台および 900 番台の管理番号を持つ中国産標本は、ノート 2 およびノート 4 では確認することができないのである。

この点について、実際の標本がどのようになっているかについて紹介しておきたい。NHNM 所蔵オジロワシの頭部および脚部標本（USNM96522）は、標本台帳において「T1」というブラキストンの管理番号が記載されている。標本にも、ブラキストンが日本滞在の後半で利用した短いタイプの紙ラベルに「T1」の記載がある。同時に、「689」の刻印のある金属タグも付属していた（写真 14）。この金属タグは日本産標本の 700 番台の管理番号に用いられてい





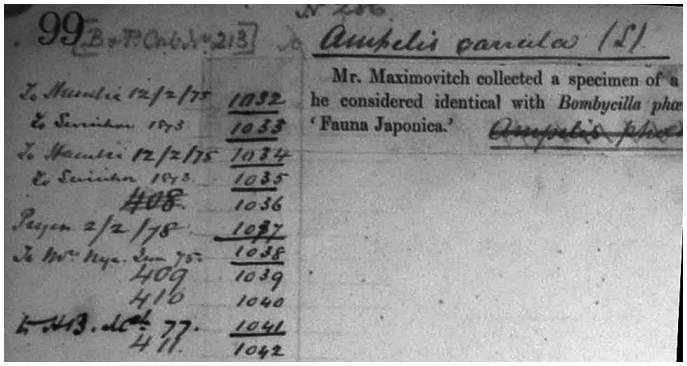


写真 11（左上）　キレンジャク（HUNHM03256）付属のブラキストンラベル「1040」の管理番号
写真 12（左下）　キレンジャク（HUNHM03256）付属の函館博物場標本番号「410」
写真 13（右）　ノート 4 のキレンジャクの項「1040」の脇に朱書「410」がある



写真 14 オジロワシ（USNM96522）に付属する「T1」のラベルと「689」の金属タグ

るものと同じもので、ノート 3 の「689」にも「*H. albicilla*、Head & Foot、1861.2.23、Ching-Kiang」という標本情報があり、この標本は「T1」であると同時に、「689」でもあることになる。大英自然史博物館トリング分館（以下 Tring と表記）所蔵カイツブリ（BM1883.12.29.18）は、ノート 3 のイギリスに持ち帰った標本リストにおいて、「T206」という管理番号と共に「B. Mus 7/1/84」という記載がある標本に該当する。標本にも「T206」の記載のある紙ラベルが付属し、同時に「685」の金属タグも付属しており、ノート 3 のカタログ情報を利用する場合はこの番号を用いなければならない。

一方、1860 年代にブラキストンがスウィンホーに寄贈し、スウィンホーが新種として記載（Swinhoe 1863）した中国産のマキノセンニュウ（*Locustella blakistoni* 、Tring 所蔵、BM1898.9.1.1380）のタイプ標本には「T」のラベルは付属せず、「581」の金属タグが付属するのみである。「T」番号が記載されているラベルは、ブラキストンが日本産標本を函館博物場に寄贈した 1879 年ごろから利用していたタイプのラベルであることから、ブラキストンは函館博物場に寄贈するために、標本を仕分けする中で日本産標本のみを従来利用していた管理番号で管理することとし、それ以外の標本については新たに「T」の番号を用いて管理することになったのではないかと推測される。しかし、「T」番号ラベルには詳細な採集情報が記載されていないため、採集日などの情報を得るためにはノート 3 のカタログ情報を利用しなければならない。今後、「T」番号標本の調査をすすめ、「T」番号と当初の管理番号との対応表の作成が求められる。ただし、NMNH 所蔵アオアシシギ（USNM95937）のように金属タグが欠落し、「T187」のみが付属する標本も確認されること、また「T」番号標本には中国産だけではなく、イギリス産標本も多数含まれており、調査には困難が予想される。

(2) ブラキストンコレクションの採集情報の追加・修正

ノート 3 には、採集地、採集日、採集者の名前などの情報がある。これにより、現存標本に付属するラベルに記載されていない情報を付け加えることができる。特に、1861 年の一時滞在時に採集した標本については、金属タグの番号しかわからないものが多く、有益である。

北大植物園・博物館所蔵ニュウナイスズメ（HUNHM03430）には、「702」の刻印のある金属タグと「574」の函館博物場標本番号が記されたラベルが付属しているのみで、採集情報は全く不明である。ノート 4 の記載から、ブラキストンの管理番号「702」を持つニュウナイスズメには函館博物場標本番号「574」が与えられており、ラベルの混入がないことを前提としてノート 3 の情報を見れば「♂、1861 ／ 7 ／ 30、Hakodadi」という採集情報を付与することができるのである。また、紙ラベルを利用していた 1872 年以降の採集標本についても、採集月の記載はあるものの、採集年次や日付の記載がないものも多い。写真 11 として提示したキレンジャク（HUNHM03256）のラベルにも採集日や採集地の記載がないが、ノート 3 によれば、これは福士成豊が 1873 年 1 月 15 日に函館で採集したものであることが分かるように、詳細な情報を得ることができる。

また、ブラキストンが自身の管理番号だけではなく、函館博物場の標本番号を併用していることで、ラベルが欠損した標本の情報を復元することも可能である。北大植物園・博物館所蔵タンチョウ（HUNHM04021）は、函館博

物場の標本番号「812」のラベルが付属するが、ブラキストンの標本ラベルは破損し紐しか現存しないため、標本の情報を得ることができない。旧稿（加藤 2012）において、1932 年に刊行されたブラキストン標本目録（Yamashina and Natori 1932）の編集に際して作成されたと推測される標本カードの存在について検討を行い、この標本に対応するものと考えられるカードに「札幌、June 1878」という記載があることを確認した。これにより、この標本が札幌産である可能性が考えられるものの、この標本カードの記載はブラキストンの標本ラベルではなく、後世に付与されたラベルに基づいて記載されている可能性があるため、全幅の信頼を置くことができないとして、判断を留保していた。しかし、ブラキストンのノート 4 によれば、函館博物場の標本番号「812」をもつタンチョウは、ブラキストンの管理番号「2581」の標本であることが確認される。これに基づいて、ノート 3 の情報を見れば「♂、1878 ／ 1 ／ 3、Saporo」と記載されていることから、このタンチョウは札幌産であることが確定する。逆に、標本カードの記載については、ある程度の信頼は置けるものの、採集日を誤読しているなど慎重に取り扱う必要があることも示される。

（3）ブラキストンの研究協力者の把握

ブラキストンのノートには、ブラキストン自身が採集したのではない標本について、その採集者の名前が記載されている。ブラキストンが報告した論文や「Birds of Japan」（Blakiston and Pryer 1878, 1880, 1882）などには、プライヤー（H. Pryer）やリンガー（F. Ringer）、織田（Ota）などの名前を見ることができるが、報文に紹介されていない名前もわずかではあるが確認できる。例えば、管理番号 1820 付近の標本採集者として、「Hilgendorf」の名前を確認することができる。

ヒルゲンドルフ（F. Hilgendorf）は 1873 年にお雇い外国人教師として来日したドイツ人で、博物学・生物学を担当し、多くの日本人生物学者を育てた人物である。ノートからブラキストンとの交流が知られ、ヒルゲンドルフの活動の記録や当時の欧米人研究者の交流の実態を示す材料としても利用できるようになる。

また、個々の標本がどの研究者の採集によるものであるのかが明確になることで、採集者ごとの標本製作方法の特徴を検討することができるようになるという利点もある。CT スキャンなどの普及により、非破壊での標本内部の観察が可能となり、製作手法の違いの解明の研究が進みつつある。なかでもヒルゲンドルフの系統、プライヤーの系統が日本の標本製作師の系譜を作り上げたとも言われており、ブラキストンから標本製作方法を学んだといわれる織田の標本、ブラキストン自身の標本とをあわせて比較することで、日本の標本製作の歴史や系統を把握するための基本情報として、ブラキストンコレクションが利用できるようになるのである。

（4）ブラキストンの研究協力者が利用した標本の特定

ブラキストンのノートには、採集者の情報だけではなく、標本の送付先の名前や送付時期の記載がある。この情報により、スウィンホー（Swinhoe 1875 他）やシーボーム（Seebohm 1879 他）のように、ブラキストンから送られてきた標本に基づいて日本の鳥類について論文を発表していた研究者が利用した標本を特定することができる。一例を挙げよう。ブラキストンが 1877 年 12 月 30 日にスクレイター（P. Sclater）に送付したとノート 4 に記載のある標本は 32 種 38 点確認できる。この標本群に含まれる種は、すべてシーボームの論文（Seebohm 1879）に確認できるものである。シーボームによれば、「Through the kindness of the Editors of 'The Ibis ' two small collections of birds from Japan have been placed in my hands for examination. The first collection contains 38 skins, sent by Mr. Blakiston from Hakodate for identification, to which Mr. Pryer has added 12 skins at Yokohama.」とあり、スクレイターに送付された標本がシーボームの手に渡ったことがわかる。スウィンホーやシーボームの論文中ではブラキストンの管理番号などが示されていない場合がほとんどであり、研究に利用した標本の再検討を行うことはこれまで困難であったが、特定の時期に送付されたブラキストンの管理番号を持つ標本を見出すことで、再検討に用いることが可能になるだろう[8]。

また、ブラキストンが標本を送付した相手先として教育博物館（現在の国立科学博物館）、現在の東京大学、開拓使などの名前もある。日本には函館博物場に寄贈された標本群以外にもブラキストン由来の標本が残されている可能性は高く、調査を進めることで再発見することができるかもしれない。

（5）ブラキストンが収集していた種ごとの標本数、収集時期の特定

ノート 4 の情報とノート 3 の採集日情報によってブラキストンが特定の種をいつまでに何点収集していたのかが判明する。これにより、前項とも関連するがブラキストンがどの標本に基づいて、論文を発表していたのかを絞り

込むことが可能となる。特に、新種記載に利用されたタイプ標本の特定の上では重要な役割を示すことになる。

キクイタダキ（*Regulus regulus japonensis*）は、ブラキストンが記載した種であり、記載に利用した標本は「A specimen, sex unknown, was obtained from a birdcatcher at the end of October.」（Blakiston 1862）という情報を持つものであるが、そのタイプ標本は現在所在不明とされている（Morioka et al. 2005）。ノート 4 のキクイタダキの項（写真 15）によれば、ブラキストンはキクイタダキを 3 点収集しており、そのうち 1862 年以前に採集された標本は管理番号「771」のみである。ノート 3 の「771」の採集情報は「1861 ／ 10 ／ 28、Hakodadi、Bird Catcher」とあり、記載とも合致することから、これがタイプ標本として指定されるべきものであると考えられる。管理番号「711」の脇には、函館博物場の標本番号「235」の記載があることから、この標本はイギリスやアメリカに送られず、函館博物場に寄贈されたことが判明する。残念ながら、現時点で北大植物園・博物館のブラキストン標本の中には金属タグの「711」と函館博物場のラベル「235」を持つキクイタダキ標本がなく、またそれに該当する可能性のある標本も見出すことができない。詳細については、今後の課題としなければならないが、採集情報が記載されたラベルが付属しなくても、このタグが付属する標本が発見されたならば、タイプ標本として指定する根拠とはなるだろう。

この他にも、イワツバメのタイプ標本として指定された標本について再検討が必要であることを示すことができる。*Chelidon blakistoni* として記載されたイワツバメは 1862 年にスウィンホーが発表（Swinhoe 1862）したもので、現在、Tring に保存されている標本（BM1898.10.20.57）がタイプとして指定されている（Morioka et al. 2005）。しかし、この標本のブラキストンラベルには「2038」の管理番号が記載されていた（写真 16）。この標本はノート 3 によれば 1876 年 7 月 24 日に採集されたものであり、スウィンホーが 1862 年の記載に利用したものではないことが判明するのである。詳細については別稿で検討するが、このノート群がもつ情報の鳥学史に果たす役割の大きさが示される。

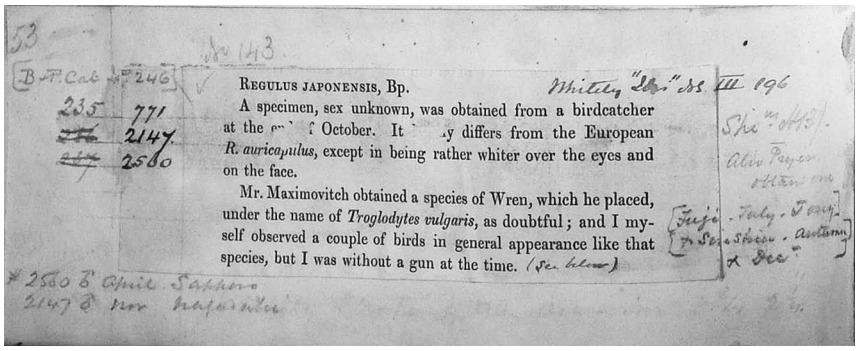

REGULUS JAPONENSIS, Bp.
A specimen, sex unknown, was obtained from a birdcatcher at the end of October. It very differs from the European *R. auricapilus*, except in being rather whiter over the eyes and on the face.
Mr. Maximovitch obtained a species of Wren, which he placed, under the name of *Troglodytes vulgaris*, as doubtful; and I myself observed a couple of birds in general appearance like that species, but I was without a gun at the time.

写真 15　ノート 4 のキクイタダキの項　「771」、「2147」、「2560」の 3 点が確認されるが、1862 年以前に採集された標本は「771」のみ



写真 16　イワツバメタイプ標本（BM1898.10.20.57）　ブラキストンのラベルに「2038」の記載がある

(6) ブラキストンによる函館博物場への標本寄贈の実態の解明

ノート 4 には、函館博物場の標本番号が記載されている。この番号は 1 から始まり 1314 まで、記載ミスと評価される若干の重複とそれに伴う欠番、また千島にのみ生息する種についてはノート 4 に記載がないため、これに対応する番号の記載がないという問題はあるものの、ほぼすべての番号が確認される。すでに紹介したように、ノート 4 には「1879　1 to 1314」という記載があること、ノート 3 の函館博物場の標本番号記載が 1338 まで増加した後、抹消や書き換えなどが行われた結果、1314 という数字に落ち着いているようである。ここから、史料上においてブラキストンが函館博物場に寄贈した標本点数に揺らぎが生じている理由として、1879 年の最初の寄贈時に 1,314 点を寄贈し、その後も継続して標本が納品されたため、1,338 点まで増加したが、最終的にはブラキストンはいくつかの標本を取り戻し、当初の寄贈点数 1,314 点に落ち着いたという旧稿の推測を裏付ける材料となる。

ノート 4 の函館博物場の標本番号の改変がブラキストンの標本の出し入れの実態を示すものであることは、次の例から確認できる。シマフクロウ（*Bubo blakistoni*♀）は、ブラキストンがイギリスに持ち帰った標本に基づいて、

シーボームが新種記載を行ったものである（Seebohm 1884b）。この標本について、ブラキストンは「Very fortunately among the specimens I exchanged with the Hakodate Museum on leaving Japan（the collection of bird-skins there amounts to over thirteen hundred, presented by Mr. N. Fukusi and myself）I secured the only example of what I had never doubted was B. maximus=ignavus.」（Blakiston 1884）と述べている。ノート 4 のシマフクロウ（ただし、ノート 4 では *Bubo ignavus*）の項を見れば、ブラキストンの管理番号「2658」の脇に、「59」の函館博物場の標本番号が記載された後、抹消されている。Tring に所蔵されているシマフクロウタイプ標本には「2658」の管理番号が記載されたブラキストンのラベルが付属しており、ブラキストンの記載が裏付けられるのである。

このように、ノート 4 の函館博物場の標本番号の情報は、ブラキストンが日本に残した標本 1,314 点の一覧ともいうべきものであって、現在北大植物園・博物館に所蔵されている 1,200 点余りと判断されるブラキストン標本の点数不足が、標本の滅失によるものであるのか、あるいはラベルの欠損により情報が得られなくなっていることによるものであるのかについて、評価する材料となる。また、ブラキストンの管理番号と函館博物場の標本番号とが併記されていることで、上述したタンチョウの例のように、ラベルの欠落によって採集情報が失われた場合の復元だけではなく、管理の過程でラベルが入れ違ったと推測された事例に対して、その根拠を与えることも可能である。

旧稿（加藤 2012）において、ブラキストン標本として管理されてきた標本のうち、函館博物場の標本番号が記載されたラベルが付属しているにもかかわらず、ブラキストンの帰国後（1885 年 7 月 23 日）に採集されたという情報のあるキセキレイ（HUNHM03137）があることについて紹介した。この標本がブラキストンの収集標本ではありえないことは明らかであり、付属する函館博物場の標本番号ラベルは混入されたものと推測した。この標本に付属する函館博物場標本番号は「322」であり、ノート 4 の記載によればこの番号はブラキストンの管理番号「732」をもつキセキレイに与えられていることが分かる（写真 17）。「732」の管理番号は、ブラキストン帰国後に採集されたキセキレイ（HUNHM03137）と同じケースに保管されていたキセキレイ（HUNHM03139）に付属（写真 10）しており、HUNHM03137 に付属している函館博物場のラベルは、本来 HUNHM03139 に付属していたものが誤って混入したものであることが確認できるのである。旧稿では現存する標本の情報のみで検討を進めたため限界が生じていたが、ブラキストンのノートの記述により標本の現状に対する評価も可能になるといえる。

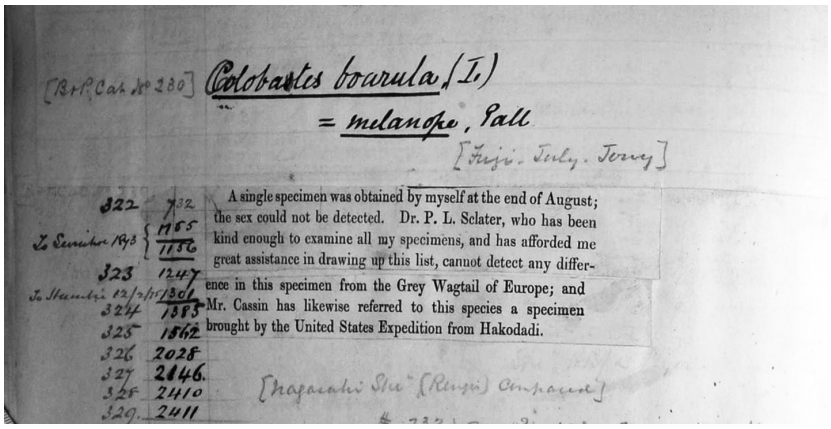


写真 17　ノート 4 のキセキレイの項　最上段に「322」の朱書番号と「732」のブラキストン管理番号が確認できる

（7）札幌博物場（現在の北大植物園・博物館）他の博物館の標本情報の収集

次に、ブラキストンのノートから得られるブラキストンコレクション以外の標本情報について紹介しておきたい。ノート 4 には、ブラキストン自身の標本情報だけではなく、他の研究者からのコメントや利用した博物館の標本についての言及がある。文字が判読しがたい部分もあるため、今後の精査が必要になるが、タンチョウの項には以下のような記載がある。「Sap. Mus. 2 young 1 adult,　Sap. Coll. Mus. 2 adult shitosi（＝千歳 , 引用者注）」、前者の「Sap. Mus.」は開拓使の札幌博物場であり、後者の「Sap. Coll. Mus.」は札幌農学校の標本室の情報であることを示している。ブラキストンの帰国後、この二つの博物館は統合され、現在の北大植物園・博物館に至っているが、ブラキストンの調査の段階ではそれぞれにタンチョウの標本が保管されていたことが分かる。特に、後者には「千歳」という情報があることから、現存する標本のうち「1878 年、千歳」採集という記録を持つ標本（HUNHM05922）はもともと札幌農学校由来の標本であると推測されるのである。筆者らは、北大植物園・博物館の鳥類標本の管理史の解明を

継続して実施しており（加藤ほか 2009, 2010, 2012）、ブラキストンのノートによって、明治初期の日本の博物館の標本の情報が明らかになることで、ブラキストンコレクション以外の標本情報の追加や、博物館史の解明にも役立つのではないだろうか。

（8）ブラキストン及び関係者の足跡などの歴史情報の収集

最後に、ブラキストンのノートは鳥学史観点からではなく、歴史学的観点からの利用も可能である。ノートに記載されている採集地・採集日の情報によって、ブラキストンや採集協力者であった福士成豊が特定の時期にどこの場所で採集していたのかが判明する。ブラキストンの北海道紀行文の情報がいつごろ書かれたのかについての考察に利用することもできるであろうし、開拓使の職員として働いていた福士のカムチャツカ調査などの記録と比較検討することも可能だろう。現時点では詳細な調査に着手していないが、古文書として残されていないような活動の記録もブラキストンのノートから見出すことも可能だろう。

おわりに

以上、ブラキストンの残したノートについて紹介した。予報として述べたように、このノート群から得られる情報は、ブラキストンを取り巻く多様な研究に利用することが可能である。今後、それらについて報告を継続してゆきたいと考えている。

本報告をまとめるにあたって、研究協力者である Andrew Davis 氏の力添えが大きな力となった。アメリカでの調査においては NMNH の Christopher M. Milensky 氏、イギリスでの調査においては Tring の Robert Prys-Jones 博士、Mark Adams 氏の協力を得た。記して謝意を表したい。

本研究は、三菱財団人文科学研究助成（平成 24 年度）を受けて行ったものである。

引用・参考文献

Blakiston T. 1861 : On Birds collected and observed in the Interior of British North America, Ibis, v3(12), 314-320

Blakiston T. 1862a : On Birds collected and observed in the Interior of British North America, Ibis, v4(13), 3-10

Blakiston T. 1862b : On the Ornithology of Northern Japan, Ibis, v4(16), 309-333

Blakiston T. 1883 : Ornithological Notes III-Messers. Jouy and Smith's Late Collections, The Chrysanthemum, v3(2), 76-81

Blakiston T. 1884 : Ammended List of the Birds of Japan According to Geographical Distribution, Taylor and Francis, London, 68p

Blakiston T. and Pryer H. 1878 : A Catalogue of the Birds of Japan , Ibis , ser.4, v2(7) , 209-250

Blakiston T. and Pryer H. 1880 : Catalogue of the Birds of Japan , Transactions of the Asiatic Society of Japan , 8,172-241

Blakiston T. and Pryer H. 1882 : Birds of Japan, Transactions of the Asiatic Society of Japan, 10, 84-186

Inukai T. 1932 : A Brief Biography of Captain Blakiston, Transactions of the Sapporo Natural History Society, 12(4), 256-261

加藤 克 . 2012 : ブラキストン「標本」史 , 北海道大学出版会 , 札幌 , 348pp　本稿の検討に最も関係のある本書第 1 章「ブラキストン標本の変遷と現状」は、加藤・市川（2001）を加筆・修正したものである。

加藤 克・市川 秀雄 . 2002 : 北大植物園所蔵ブラキストン標本の受入過程とその現状 , 北大植物園研究紀要 , 2, 1-24

加藤 克・市川 秀雄・高谷 文仁 . 2009 : 札幌農学校所属博物館における鳥類標本管理史 (1) : 東京仮博物場から札幌農学校所属博物館初期まで , 北大植物園研究紀要 , 9, 29-94

加藤 克・市川 秀雄・高谷 文仁 . 2010 : 札幌農学校所属博物館における鳥類標本管理史（2）: 明治期の札幌農学校所属博物館 , 北大植物園研究紀要 , 10, 9-96

加藤 克・市川 秀雄・高谷 文仁 . 2012 : 札幌農学校所属博物館における鳥類標本管理史（3）: 大正～昭和期の博物館 , 北大植物園研究紀要 , 12, 1-84

Morioka H., Dickinson E. C., Hiraoka T., Allen D. and Yamasaki T. 2005 : Types of Japanese Birds, National Science Museum monographs 28, 154p

Seebohm H. 1879 : Remarks on Messrs. Blakiston and Pryer's Catalogue of the Birds of Japan, Ibis, Ser.4, v3(9), 18-43

Seebohm H. 1882 : Further Contributions to the Ornithology of Japan, Ibis, ser.4, v6(13), 368-371

Seebohm H. 1883 : Exhibition of a new species of Owl from Yezzo, Proceedings of the Zoological Society of London, 1883, 466

Seebohm H. 1884a : Further Contributions to the Ornithology of Japan, Ibis, ser.5, v2(5), 30-43

Seebohm H. 1884b : Further Contributions to the Ornithology of Japan, Ibis, ser.5, v2(6), 174-183

Seebohm H. 1885 : Further Contributions to the Ornithology of Japan, Ibis, ser.5, v3(12), 363-364

Seebohm H. 1890 : The birds of the Japanese empire, R.H. Porter, London, 386p

Stejneger L. 1886a : Review of JAPANESE BIRDS.1, Proceedings of the United States National Museum, 9, 99-124

Stejneger L. 1886b : Review of JAPANESE BIRDS.2, Proceedings of the United States National Museum, 9, 374-394

Stejneger L. 1886c : Review of JAPANESE BIRDS.3, Proceedings of the United States National Museum, 9, 395-408

Stejneger L. 1887a : Review of JAPANESE BIRDS.4, Proceedings of the United States National Museum, 10, 4-5

Stejneger L. 1887b : Review of JAPANESE BIRDS.5, Proceedings of the United States National Museum, 10, 271-319

Stejneger L. 1887c : Review of JAPANESE BIRDS.6, Proceedings of the United States National Museum, 10, 416-429

Stejneger L. 1887d : Review of JAPANESE BIRDS.7, Proceedings of the United States National Museum, 10, 606-611

Stejneger L. 1888a : Review of JAPANESE BIRDS.8, Proceedings of the United States National Museum, 11, 425-432

Stejneger L. 1888b : Review of JAPANESE BIRDS.9, Proceedings of the United States National Museum, 11, 547-548

Swinhoe R. 1862 : On some Tientsin Birds, collected by Mr. Fleming, R.A., in the possession of Mr. Whiteley, Proceedings of the Zoological Society of London, 1862, 315-320

Swinhoe R. 1863a : Additions and Corrctions to the Ornithology of Nothern China, Ibis, v5（12）, 87-97

Swinhoe R. 1863b : Notes on the Ornithology of Northern Japan, Ibis, v5（20）, 442-445

Swinhoe R. 1874 : On some Birds from Hakodadi, in Northern Japan, Ibis, ser.3, v4（14）, 150-166

Swinhoe R. 1875 : On the Contents of a second Box of Birds from Hakodadi, in Northern Japan, Ibis, ser.3, v5（20）, 447-458

Swinhoe R. 1876 : On the Contents of a third Box of Birds from Hakodadi, in Northern Japan, Ibis, ser.3, v6（23）, 330-335

Swinhoe R. 1877a : On the Contents of a fourth Box of Birds from Hakodadi, in Northern Japan, Ibis, ser.4, v1（2）, 144-147

Swinhoe R. 1877b : On a new Form of Reed-bird from Eastern Asia, Ibis, ser.4, v1（2）, 203-205

高倉新一郎・関秀志・笹木義友・門崎充昭 .1986 : 幕末維新期における欧米科学技術の摂取について - 福士成豊を中心に -, 北海道開拓記念館研究年報 , 14, 45-68

Temminck C. J. and Schlegel H. .1850 : Fauna Japonica Aves, L. Batavorum, Amstelodami, 141p

Yamashina Y and Natori B. 1932 : A list of birds' skins presented by Captain Blakiston, Transactions of the Sapporo Natural History Society, 12(4), 213-255

彌永 芳子 .1979 : トーマス･W･ブラキストン伝 , トーマス W. ブラキストン , 近藤唯一（訳）. 蝦夷地の中の日本 , 付録 , 445-617, 八木書店 , 東京

[1] 正式名称は北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園。植物園との統合前の旧称は北海道大学農学部博物館である。
[2] このスクラップに貼り付けられている印刷物は、雑誌そのものから切り取られたものではなく、別刷りを切り抜いたもののようである。
[3] 揚子江探検については彌永（1979）に詳しく解説されている。
[4] ブラキストンが商人として函館に居住するようになったのは 1863 年であり、ノート 3 の記載が始まる 1872 年までの間に鳥類標本を採集していたのかどうかについては明らかにならない。鳥類採集よりも日本での商売の安定を優先していた可能性もあるが、今後の課題としておきたい。
[5] 例として、種番号 149 1/2 ツルクイナは、リンガーが長崎で収集した標本が日本産唯一のもので、他は中国産というブラキストンの理解（Blakiston and Pryer 1882）により、ノート 4 に記載されなかったものと考えられる。
[6] ノート 4 に欠けているものは千島産やカムチャツカ産の標本の管理番号である。
[7] この標本はカムチャツカ採集標本であるため、ブラキストンの日本産標本管理番号とともに、「T」番号を重複して持っている
[8] ブラキストンがシーボームやスウィンホーに送付した標本の多くは Tring に所蔵されているようではあるが、NMNH の標本台帳からも確認されるように、シーボームのコレクションのすべてが Tring に保存されているわけではないし、スウィンホーのコレクションも他のコレクターに譲られていることが把握できることから、ブラキストンの手を離れた後の標本の動きについての調査が必要である。
[9] 現在の学名は *Ketupa blakistoni* となっている。